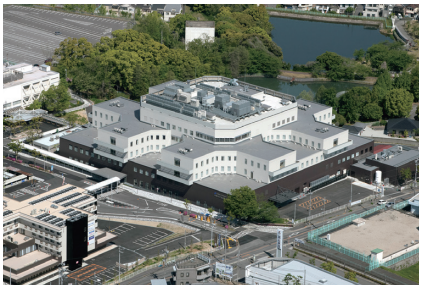
病院建築
最前線
150

IWAHORI'S EYE

古代からの歴史に彩られた南河内の地で、コロナ禍対策含む現代の医療課題に対峙。地域医療と高度専門医療提供の両立目指す

白鳥になったヤマトタケルが飛び去る様子を語源とする大阪府羽曳野市。
同市で1952年結核医療施設として誕生し、その後、診療体制を充実させつつ
基幹病院として半世紀以上の歴史を刻んできた大阪はびきの医療センター。
高まるばかりの期待に応ずるべく、昨年、同敷地内での新築移転を果した。

選者／考察者 岩堀幸司（建築家）
写真／フォト・アトリエ・F　古川泰造



this month Architecture

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪はびきの医療センター

羽曳野市は大阪府の南河内地域に位置し、応神天皇陵古墳の他、古代史跡の多い地としても広く知られる。市内そこかしこに溜め池があり、古くから地域の農業や防災に重要な役割を果たしてきた。大阪府立病院機構大阪はびきの医療センターの敷地は、その溜め池のひとつである石曳池に面しており、この独特な環境を生かした敷地内での新築移転計画が実施され、昨年5月にオープンした。

「地域に信頼され、地域になくてはならない病院」として、南河内地域の医療ニーズに応える総合的拠点病院を目指しての出発と謳っているだけに、確かに機器・設備だけでも納得させられる充実ぶりである。旧病院では運用的に困難であったという最新鋭の手術支援ロボット、ハイブリッド手術室等、高度専門医療に必須のインフラは当然のようにある。

1階分の高低差を逆手にとる池に面した環境の積極活用

さて、建築である。まず外観だが、上下2色に色分けしてシックかつスタイリッシュな外観は、決して威圧的な感じを与えていないのがいい。

建物の全体構成は、同院の嚆矢でもある45床の結核病棟を池に面した一階に配置し、好環境に配慮しながらサービス車両等の出入り口を設けている。なお、南北で約1階分の高

メインエントランスから北方向に突っ切るホスピタルストリート。「はびきのの杜」をコンセプトに曲線を多用した造形に加え、色使いも穏やかである

1階のデイルーム。開口部が極めて大きい窓の外には、
「はびきのガーデン」という名の庭の向こうに石曳池を望むことができる

各ブロック受付はアルファベットとカラーですぐに分かるようにしている。
診察室のフリーアドレス化のため診療科は非表示

低差があることから、グランドレベルとなっている2階を主入口・救急アプローチとしており、複雑な病院出入り動線を見事に解決している。

外来患者が利用する部門は2階、管理・重症病室・手術と関連部門は3階に配し、それぞれ非常に巧みに完結させている。

4・5階の病棟は、旧病院では高層階かつ細長い〝よくある〟形状であったが、新病院は放射状に広がるワンフロア4看護単位にしていることを始め、いかにも機能的である。

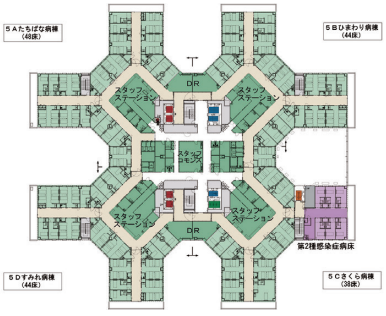
リハビリテーション・食堂の入る6階は病棟ウイングから後退させていることから、外からは一見地上4階建てにも見え、「どっしり」した安定感があるのも好印象を覚える。

将来を見据えた外来の取り組み 熟考されたエレベータリング

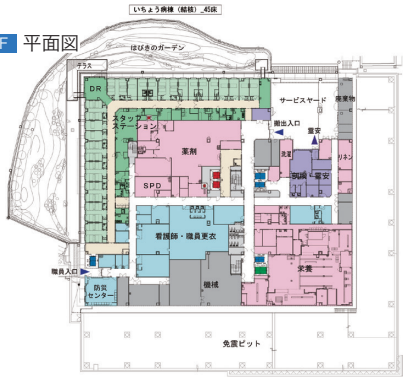
本院建物の特長の1つは2階の「1フロア外来」であろう。この外来診療機能を集約させるために、「患者案内」については関係者がWGで議論を重ね、診察・検査受付は全て通しでアルファベット表示とすることにしている。外来診察室は、Cブロック：40～、Dブロック：60～という具合に、診察室番号が通しで付けられており、フリーアドレスの採用に加え、ブロック・診察室とも固有名詞表示はせずに将来の変更対応を考慮している。これも新しい考え

配置図

5F 平面図

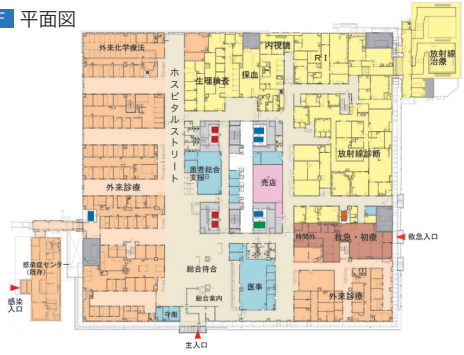


1F 平面図

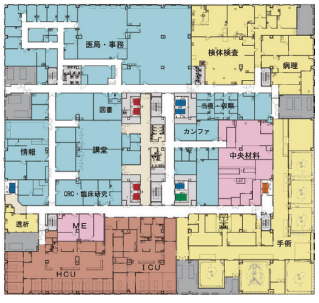


6F 平面図

2F 平面図

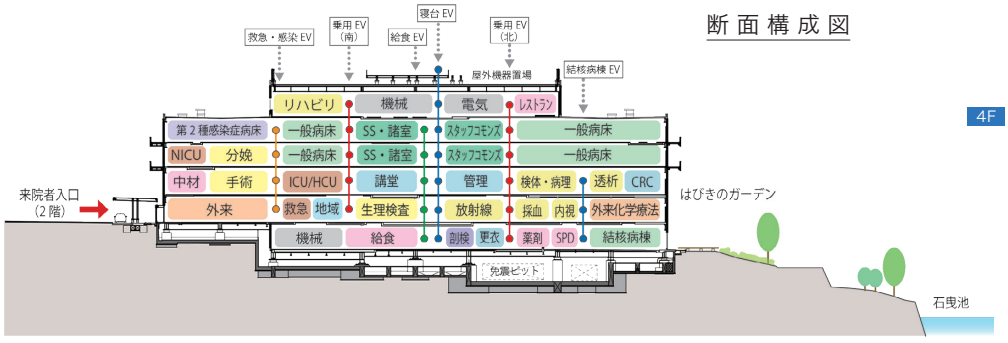


3F 平面図



4F 平面図

断面構成図



だ。

また、救急玄関・初療室から3階の手術・重症病室、5階感染症病室ゾーンへの直通エレベータ（以下EV）の他、計4台の業務用EVと、見舞客などのための乗用EVが南の2病棟と北の2病棟で2台ずつ配置されている。4台の業務用EVは1～5階まで廊下で直結しているが、病棟とバックヤードの一体化を優先して、乗用については南北のバンクでは直結させていない。そのために、2階外来階で北・南病棟用と明示して間違いないように案内をしている。

働く環境への十分な配慮とパンデミック対策の病棟

病棟の特長を付け加える。Y字型を4つ組み合わせた放射状になっているが、Yの縦棒の中央にスタッフステーション（以下SS）が配置される。左右の病室及び廊下は見通しも良く、見守り体制は十分であると見た。SSは4病棟が集まる中央コアを共有しているが、その中心を〝スタッフコモンズ〟というスペースにしており、文字どおりスタッフのコミュニケーション・休憩の場となっている。これも面白い工夫だ。

なお、本事業は新型コロナ緊急事態宣言期間と重なったことから、万全の感染症対策、パンデミック対応強化が図られたことは特筆すべきことだろう。即ち、1階結核病棟の病室入口はエアタイト引き戸とし、病室内の陰圧2・5Paを確保。さらに、第2種感染症病床を5階病棟の南東に6床配置し、2階（接地レベル）救急入口からは前出のとおり手術部門、感染症病床に直結する専用EVの設置によって、一般患者とは動線を完全分離している。

また、コロナ禍が進む中、設計とは関わりなく細やかな工夫が随所に加えられたという。1例を挙げると、5階の北東・南東病棟のSSではカウンター部分を取り外し式パネルで区切りクリーンゾーンを形成できるようにしたという。これも設計・施工会社からの提案だったとのことだが、斯様な配慮は病院建築への造詣が成すところであろう。

※本事業は基本設計後、設計施工一括発注という形のデザインビルド方式を採用しているが、よくある減額のために基本設計を大きく変えることは禁止とされ、基本設計のコンセプトを曲げないという条件付きの事業であった。例外的に変えたのは、コロナ禍で感染防止対策を基本設計段階より増強したことと、一部設備機械機能を1階から6階に移してルート短縮を図った程度だという。

もとより結核を中心にした感染症対策に重きをおいている設計が、功を奏したといえよう。

開院して72年を迎えた今、コロナ禍が更に同院の特長を骨太にしたと言えないだろうか。

4階4床室。眺望は極めてよく、床の木目調を含め明るい雰囲気を醸し出している

急遽、5階の北東、南東病棟SSに設置したアクリル板でCOVID-19対策を講じる

スタッフのコミュニケーション、リラックスの場である「スタッフコモンズ」

地方独立行政法人大阪府立病院機構　大阪はびきの医療センター

所　在　地：大阪府羽曳野市はびきの3丁目7番地1号
病　床　数：全405床

［建築概要］
敷地面積：69,368.78㎡
建築面積：8,601.4㎡
延床面積：34,199.7㎡
構造規模：S造一部RC造　地上6階、塔屋1階（基礎免震構造）
最高高さ：32.59m
設計期間：2018年9月～2021年1月
工事期間：2021年2月～2022年12月
基本設計：山下設計
実施設計：竹中工務店
工事監理：山下設計
施　　工：竹中工務店